

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

技術情報第5号

育苗期のイチゴうどんこ病及び炭疽病の発生について

イチゴうどんこ病は、調査地点での発生が前年より多く、調査地点以外でも発生が多い育苗ほが見られます。うどんこ病は40～70%の湿度でも発生しますが、多湿条件でより発生が助長されます。向こう1か月の気象予報では、降水量は平年並か多く、今後の多発が予想されます。また、去年は夏期の冷涼な気候により育苗期のうどんこ病菌の菌密度が低下しないまま本ほに持ち込まれたことが、本ほでの多発の原因の一つと考えられ、昨年多発したほ場では親株から子苗への感染が懸念されますので、より注意が必要です。

防除は多発すると困難になるので、薬剤による予防散布を徹底してください。また、苗の間隔を空け、通風を図るなど、発病しにくい環境づくりにも努めましょう。

イチゴ炭疽病は調査地点での発病は確認されていないものの、今後、降水量は平年並か多いと予想されていることから、発生が助長される可能性があります。本病は一旦発病すると防除が困難になるので、予防防除に努めましょう。

1 対象作物名：イチゴ（育苗期）

2 病虫害名：うどんこ病、炭疽病

3 発生状況

(1) うどんこ病

育苗期の6月5半旬調査の結果では、発病株率は平年よりやや低いが前年より高く、発病株率20%以上の調査地点も見られた。

- ・発病株率 **14.5%**（前年 8.2%、平年 18.9%）
- ・発病ほ場率 **50%**（前年 50%、平年 66.5%）

調査地点以外でも、発病が多いほ場が見られる。

(2) 炭疽病

現在、調査地点での発病は見られない。調査地点以外でも発病は少ない状況である。

4 防除上注意すべき事項

(1) うどんこ病

- ア 不必要な親株は速やかに育苗ほから撤去する。
- イ 苗の間隔を空け、通風を図る。
- ウ 発病葉の早期発見に努め、見つけ次第速やかに除去し、薬剤防除を徹底する。
- エ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



葉裏での菌叢を伴う病徴



葉での菌叢が消失した病徴

(2) 炭疽病

- ア 不必要な親株は速やかに育苗ほから撤去する。
- イ 雨よけ育苗等でも風通しが悪いと発病しやすいため、苗の間隔を空け通風を図る。
- ウ 窒素肥料を多用すると発病しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- エ 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがあるので、ほ場内での発生状況に注意し、発病苗及び周辺の苗は速やかに持ち出し処分する。
- オ 葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的に予防散布を徹底する。



葉での汚斑状の病斑



葉柄での病斑